
転生の円舞曲（ワルツ）（仮）

金城 ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生の円舞曲^{ワルツ}（仮）

【Nコード】

N5512C

【作者名】

金城 ヨウ

【あらすじ】

死に引き裂かれた二人は、転生を重ね、一万年と二千年後、再び出会う。こういった感じの電波を受信したので、ために形にしてみました。でも連載しないと完結しないお話です。実際に今回は、プロローグと第一話という感じです。

(前書き)

すみません。この話は完結していません。

プロローグと第一話という感じです。

それでも良いとって下さる方は、ご案内させていただきます。

一万年と二千年前。

「アザナエル様、お待ちください」

白銀の甲冑を着た女性を、メイド服の女性が引きとめようとしている。この二人には共通点があり、金髪碧眼であること、そして背中から大きな純白の翼が生えている。甲冑の女性は三対六枚の翼、メイド服の女性は、一対二枚の翼。

アザナエルと呼ばれた甲冑を着た女性は、メイドを無視して廊下をきまつた歩調で歩く。そして振り返らずにメイドに下がるように告げる。

「しかし、フアリエル様、戦死の報に間違いはありません」

「だまれ！フアリエルは熾天使だぞ。悪魔達などに討たれるはずは無い。私は、真偽をこの目で見るまで信じぬ」

「だからと言って、知天使^{ケルブ}であられる、アザナエル様が戦場に赴くなど」

アザナエルは、メイドの娘に向き直ると怒りの表情で腰の剣を抜き、切っ先を娘に向ける。剣は、今のアザナエルの心中を表すように炎に包まれている。

「私が、悪魔どもに後れを取るとでも？」

「いえ、そんなことは……」

いきなり剣を向けられ困惑するメイド娘。

「剣をお引きください。アザナエル様」

声と共にアザナエルとメイド娘の間に、男が現れる。

「サナエルか。フアリエル様はどうしたの」

「もう、お聞きになっているはずです。これを」

サナエルがアザナエルに一振りの剣を差し出す。アザナエルはその剣を受け取ると鞘から抜いた。

「これは、フアリエル様の剣……」

そして、頭の中に流れ込んでくるファリエルの最後の姿。アザナエルはファリエルの剣を抱きしめる。

「ファリエル様、アザナエルは、何百、いえ、何千回生まれ変わっても、ファリエル様を見つけ出します。待っていてください」

アザナエルの青い瞳から、涙が零れ落ちた。

現代、天界。

「主よ。大変でございます」

白髭白髪 of 老人の部屋に飛び込んできたのは、一対二枚の白い翼を持つ下級天使だ。

「天使長様、ミカエル」ティアエル様が、これを残していなくなりました」

老人は、天使から書状を受け取る。中身は『ファリエル様が見つかったので、天使長を辞めます。探さないでください』と書かれている。

「主よ。大変でございます」
書状を読んでいると、更にもう一人、下級天使が部屋に飛び込んできた。

「天使長様が、天使長様が天界の門を強行突破しようとして、門番たちを相手に大暴れしています」

「能天使達を動員してもかまわん。ミカエルを連れ戻せ。絶対に天界から出してならぬ」

しかし、指示が出された頃には、天界の門の門番たちは、全員沈黙していた。

ここで、時間を少し巻き戻す。

その女性が白銀の甲冑姿で天界の門にやってきたのは、門番たちが知る限り初めてのことだったが、彼らは上司であるその女性を丁重に門の中に招き入れた。

「天使長様、本日はどのような用件でございましたか？」

門番たちの指揮官、二対四枚の翼を持つ能天使エクスシアはたずねた。

「天界の外に出る。門を開けてください」

「かしこまりました。では、主の許可証をお見せくださいますか？」

「許可証は無い」

「は？どういふことでございましょう？」

能天使エクスシアは聞き返していた。門を通過するには、主の許可証が必要なことくらい、三対六枚の翼を持つ熾天使セラフであり、天使長であるこの女性が知らないわけは無い。

「言葉の通りだ。ここは実力で通させてもらおう」

「それは、主への反逆罪と知っての発言か？」

「一万年と二千年、やっとフアリエル様を見つけたのです。私は、墮天されてもかまわないと思っていますの」

熾天使セラフが剣を抜くと、門番たちもそれぞれの武器を構えた。

召集された能天使達エクスシアが、天界門に着いたときには、天使長ミカエルミカエルの姿は無かった。代わりそこにあるのは、気絶させられた門番たち。

しかし、この情報は天界の一部のものを除いて開示されることは無かった。魔界との関係が緊迫している今、天使長が地上界に降りたというスキヤンダルを、公にはできなかつたのである。

同日、魔界。

「なに？アスタルトがいなくなつた」

使い魔ファミリアがアスタロスに報告する。とそばにいた魔王サタンが反応を示した。

「お嬢さんがどうかしたのか？大公爵」

「娘が地上界に家出したようです。しかも、ケルベロスJrもつれて」

サタンだけでなく、周りにいた悪魔たちも騒ぎ出す。

「確かお嬢さんの魔力は、大公爵よりも強かったと記憶しているが……」

「はい、その通りでございます魔王様^{サタン}」

返事を聞いて魔王^{サタン}は腕を組む。

「地上界を滅ぼせるほどの魔力の持ち主が、野放しというわけか。

大公爵、至急にお嬢さんを連れ戻せ。今、このことが天界に知れたら非常にまずい」

「はい。そのつもりです。では失礼します」

アスタロスは、会議室を急ぎ足で出て行った。

「しつこい……」

黒い三首の巨大な犬の背中に乗った、年のころ十七、八の少女は後ろを振り向きつぶやいた。黒髪黒眸の少女で、背中には三対六枚の漆黒の翼。地上界でいうゴスロリ風のファッションが良く似合っている。

後ろには、「アスタルトお嬢様、おまちください」などと叫びながら追いかけてくるものが数人。追いかけてくるのは家の召使たちだ。

とはいえ地上界とつながる地獄門までもう少しだ。振り切るのは時間の問題なのだ……

「地獄門までこのまま行っちゃうと、私たちはともかく、あの人たちはあなたのお父さんに食べられちゃうわね」

自分の乗る三首の黒犬、ケルベロスJr（愛称：ケルちゃん）に話すと、「地獄門に行くと、どうなるかは、彼らもわかってるよ。」

放っておけば」という思念がアスタルトに流れ込んでくる。

「そもそも、いけないのよ」

アスタルトは、呪文スベルを詠唱し始める。

「混沌たる者 闇の中の王 その力を願い求める 闇の眠りを与えよ」

呪文が完成すると追っ手の召使たちが一人、また一人と地に臥していく。死んではない、ただ眠っているだけだ。雇い主である父の叱責は受けるかもしれないが、このまま進んで地獄の門番ケルベロスに食べられるよりは、はるかにマシである。

「さあ、ケルちゃん、急ぎましょう」

アスタロスが声をかけると、ケルベロスJrはうれしそうに吠えた。

「一万年と二千年、やっと見つけたのです。待っていてくださいフリエル様」

アスタルトは、頬を赤らめてつぶやいた。

大公爵アスタロスが地獄門に到着した時には、娘のアスタルトはケルベロスJrと共に地上界に出た後だった。

地上界。

「おはよう。奈江なえちゃん」

小学校高学年ぐらいの少年が、年の頃十五、六の少女に声をかけた。ただ妙なのは少年が、名門私立高校の制服を着込んでいることである。結果から言えば妙なことはない、彼、蒼天そうつてんじん仁は高校に通う一年生で、今年十六歳になるのだから。ただ百四十五センチの身長と童顔が彼を小学生に見せている。

「おはよう。仁」

奈江と呼ばれた少女が振り返って微笑んだ。仁より頭ひとつ分は背が高い。美少女と言ってよい顔立ちだ。人と違う点があるとしたら

その瞳の色だろう。右の瞳が黒、左が夏の空のような青色をしている。オッドアイ、ヘテロクロミヤなどと呼ぶ。

仁と奈江は幼馴染だが、仁の身長と童顔のせいで、姉弟に間違われることが多々ある。

ともあれ、学校へ向かい二人は並んで歩き出す。

「昨日、変な夢を見て、寝不足でかなわん」

「どんな夢を見たの？」

奈江が、興味津々といった感じで聞き返してきた。

「シルエットになっていて、どんな容姿なのかわからないけど、女の人に名前を呼ばれるんだ。なんか六枚の翼が背中から生えていたような。それで、呼ばれる名前んだけど、仁でなくて、フェリエルとかファリエルとかそんな感じの名前……」

「夢の中で、その人になっただけじゃないの？」

納得していない仁の表情。

「でも、確かに自分のことだっただけわかるんだよね。不思議なことに「ただの夢よ。気にしないで学校にいこう」

奈江の微笑みに、仁は夢のことを無視することにした。

始業前、奈江は自分の席から、男友達と話す仁を眺めていた。

今朝の、仁の夢の話しには驚いた。奈江が最近見る夢の内容と共通部分があるからである。

夢の中で、奈江はアザナエルという女性天使になっている。背中には三対六枚の翼。

その奈江の前で落ちていく、金髪碧眼の同じく三対六枚の翼を持つ男性。しかし、奈江は確信していた、その男性が仁であることを。そして奈江は叫ぶ。「ファリエル様」と……

「三対六枚の翼」「ファリエル」「ファリエルと名前を呼ぶ女性」ただの偶然なのだろうか。

詳しく話を聞いたわけでもないのにつながる奇妙な符合……
でも、いくら考えても答えは出なかった。

「ご馳走様でした」

奈江に作ってもらった弁当を食べ終えて、仁は芝生の上に横になる。

「ちょっと、仁。お行儀が悪いよ」

奈江が注意するが、いつものことなので通用しないことはわかっている。

奈江が何故、仁の弁当を作っているかという、恋人同士というわけではなく。単身赴任の父親に母親が付いてしまったため、仁が一人暮らしを余儀なくされているためである。

しかも、仁は放っておくと、三食カップラーメンで済ませてしまうほど食事に無頓着だ。

背が伸びないのも、その辺に原因があるかもしれないと奈江は思っている。

ともあれ、元々世話好きの奈江は、仁を放っておくことができずに、毎朝毎晩お隣の蒼天家に通っている。

いつもと同じ昼休みのはずだった。このときまでは。

二人の目の前に、三首の巨大な黒犬が現れた。あまりのことに硬直して動けない仁と奈江。

黒犬、ケルベロスJrも、二人に危害を加えるつもりが無いらしい。あくびをして首の後ろを掻いている。

ケルベロスJrの前に一人の少女が降り立つ。黒髪黒眸の顔立ちの整った人形みtain愛らしい少女で、背中には三対六枚の漆黒の翼、ゴスロリファッションが少女の美しさを際立たせている。その少女が仁を見つめる。

そして、仁と奈江を挟んでケルベロスJrとは反対側に降り立つ

た人物。

白銀の甲冑に身を包んだ金髪碧眼の女性。背中には三対六枚の純白の翼。こちらは綺麗なお姉さんタイプだ。黒の少女と同じように彼女も仁を見つめている。

さらに状況が理解できずに、硬直している仁と奈江……

しばらくして、黒の少女、アスタルトと白い女性、ティアエルは同時に叫んだ。

「「ファリエル様。一万年と二千年前から、お会いしとございまして！」」

二人が仁に抱きつく。

この日から、天使と悪魔と人間の奇妙な共同生活が始まった。

(後書き)

この話、【創聖のアクエリオン】を聞いているときに電波受信しました(笑)

ちなみにこんな歌です(サビ)

一万年と二千年前から あ・い・し・て・る

八千年過ぎた頃からもっと恋しくなった

一億と二千年あとも愛してる

君を知ったその日から 僕の地獄に音楽は絶えない

歌詞：<http://plaza.rakuten.co.jp/edgerunners/diary/200506160000/>

動画：<http://www.youtube.com/watch?v=HWBOPJ0srjI>

今回は、断片的に浮かんだものを適当に形にただけです。

設定を作りこめば、今回の分だけでも、プロローグ、第一話、三話まで作れたはずです。

でも、連載モノを増やす予定は今のところ無いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5512c/>

転生の円舞曲（ワルツ）（仮）

2010年10月8日15時46分発行